

# 暮らし丸ごと見守る

## 母子施設(上)

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

### 第4部 支援の現場から (7)

「ただいまー」。午後3時すぎ、那覇市母子生活支援センター「きんぐ」にランドセル姿の子どもたちの元気な声が響いた。

構内時、子どもたちの髪や体は少し濡れている。「おかえりー。車はちゃんと乗立てに立ってよー」。タオルを手渡しながら職員が声を掛ける。

「今日、学校で賞状もらったよー」。昨日のテレビで「明日、学校でドンジポール大会がある」。子どもたちがにぎやかに自分の状況を話した。

前置の住宅街に建つきんぐには現在20世帯の母子家庭が暮らす。夫の暴力(DV)から逃れ

てきたり、経済的に困窮していたり、それぞれ事情を抱える。運営は1ルームから2Rくらいまで、アパートのまわりに独立して出入りに職員と必ず顔を合わせるので、自然と絆が始まる。

困難を抱えた母子世帯に安心・安全な住環境を提供することも、専門知識を持った職員が子育てや生活、財力をサポートする母子生活支援施設。富島母子施設長は「親子を分離せず、生活の場を丸ごと見守るのがうちの強み」と強調する。

「お父さんがいじわるで逃げてきた。お母さんの顔をちんちんたたいたり、殴ったりした。おれとお兄ちゃんとお母さんを守ったんだよ」。小学生の男の子がほ



スタッフが揃えて、以前より丁寧に子どもたちの勉強を見てあげられるようになった。那覇市首里高野町の市母子生活支援センター「きんぐ」

## 学習に力「選択肢増やしたい」

つりと話した。職員はDVのある世帯は全体の約3割に上る。表面的には元気がいいけれども、深いトラウマを抱えている子どもたちがいる。きんぐに入っている子どもは落ち着くと、子どもたちが変化が現れる。今まで押さえていたもの

が飛び出さずに、わがままになつたり、甘えん坊になつたり、よこしいたり、中には不登校になる子どももいる。

「感情が出るのは大切なことで、お母さんたちはパニックに陥るがそれはOKなことなんだよ」と専門知識を持った職員が説明する。富島さん、学校とも密な情報交換を欠かさないという。

きんぐの今、特に力を入れて

高野町 随時掲載

いるのが学習支援だ。小学生は、母親が仕事から帰るまでの時間を、施設内の学習クラブで宿題をしたり、トランプのゲームのある場所で遊んだりして過ごす。

子どもたちの中には、家庭が不安定で勉強どころでなかったり、親が忙しかつてかまっていられなかったりして、学習習慣が身につけていなかったり、勉強が進んでいる子どもも少なくない。学習では、宿題の徹底に力を入れている。

県・市の予算がついて、この4月から、2人だった学習担当の職員に、学習支援のパート4人を増員することができた。週末はアルバイトの専任若手もやってくる。マンパワーが増えたことで、一人一人により丁寧に寄り添えるようになった。高校受験を控えた中学生には個別の学習支援も実施している。

富島さんは「子どもたちの将来の選択肢を増やしたい。そのためには学力をつけることが大切」と力を込めた。